

私の幼児教育論



平岩 定法

はじめに

まだ若輩の私が、「私の」幼児教育論を展開するのは、おこがましいことであるが、与えられた機会を大切にすの意味で、若干の試見を展開したい。読者のみなさまの大いなる批判をお願いする次第である。

内容的には、次の二点を中心のべてみたい。一つは、実践記録のとらえ方について、もう一つは、園長専門職論である。

実践記録を書く

実践記録の書き方、とらえ方については、小川博久氏の提案が展開されており、私も、日頃氏の論調に関心をもって読ませていただいております。大いに学ばせていただいている。

幼児理解のための実践記録のまとめ方は、いろいろあるが、私は、保育者自身の保育を見る目の変革過程を重視する立場から、保育者が保育実践をいかに生の感情を、あるがままに表出し、それを客観化するかに、大きな意義をみいだしている。自らの保育

観を、ありのままに書く、と一口に言うが、なかなか容易なことではない。ある場面で、幼児の一言や行動が何を意味するかは、前後の経過と総合的判断に立たない限り、理解されないのである。

保育者が、自らの保育を、自らの言葉で記述する。このことは、一歩誤ると自己顯示となり、自己をいつわる記述となる。自己をいつわる実践記録は、いかにすばらしい内容をもとうとも、研究対象となりえない。一個人の研究が、集団的検討を経ることにより、はじめて、真実へ接近する基盤ができる。

幼児の一言が、保育者にとって、いかなる意味をもって迫るのか、そのことの意味は、保育者の保育観の水準の反映でもある。

一言の意味の重要性、すなわち、実践の微視的分析の意味が問われる。

実践分析の基本は、あくまで分析作業を通して、保育の前進が保持され、保育者の基本姿勢が変革されていくことにある。子どもを見つめる目の変革があつてこそ、はじめて、記録をとる意味、分析を行う意味が明確化される。保育者が変らないような実践記録は、徒勞である。実践記録の継続的分析過程は、必ず保育者の血と肉となるはずだからである。

保育者の記録の表現の一つひとつが、十分に吟味される必要が

ある。これは、ある意味で、保育者が心理学者であり、作家であることの必要性を示している。実践の記録化は、文章表現を通してのみ表象化される過程である。ルソーの『エミール』が、永遠の古典として読みつづけられることは、この作品が、ありのままに事実に向かうとしているからでもある。人間理解の真実への接近姿勢が、我々を引きつけるのである。

保育者にとって、実践を記録することは、自らのむなしさと誤りを告白することである。絶対無びょうな実践はありえず、絶対的完全性への接近こそが、最低の要求である。自らの実践を公的に、明らかにし、己れの苦しみを披歴するのは、大変な努力、自覚がいる。こうした苦しみの上に書き上げられる実践記録は、たとえ、ちょっとした事実であつても、我々の胸をうつのである。共感の生れる実践が誕生してこそ、自らの実践を公開する意味が存在する。

変るものと変らないもの

子どもとの共感の世界の拡大は、実践記録を通して語られる。

その記録は、一日の保育のものから、一年をこえる実践記録のもので、多くの形態が存在する。そのいずれもが、子どものしあ

わせと発達を願う立場から、描かれている限り、評価の対象となりうる。

今日の子どもの生活の世界の変化は、大変な問題である。保育実践は、こうした生活現実から、切り離されて存在するものではない。生活形態の変化は、保育実践の変化にもつながっている。もちろん、時間、空間をこえて永遠に変わらない子どもの姿が存在することも事実である。変わるものと変わらないもの、この二つの姿が、どのように明らかにされていくのか、保育者のかかわり方は、どのように変わっていくのか、私たちの課題は、永遠である。

私たちが記録を通して明らかにするのは、変わるものか、変わらないものであるのか。「幼児理解」とは、実践の最も基本原則であるが、一体、私たちは、どこまで、この課題に迫りえているのか。ルソーの『エミール』が二百余年前に明らかにした乳幼児の独立像を、どの程度のりこえて、創造的幼児像が展開されているのだろうか。

何十万年の人間の歴史の中で、乳幼児が意識的にとらえられて、わずか三百年たらずである。もちろん、種の保存としての子育ての技は、永遠の課題として、人類誕生以来、たえることなく続行され、何十億の人類を生存させるまでになった。

保育実践の展開は、この気の遠くなる歴史性の中で展開され、

継続されている。現実の生活体験の中での「幼児理解」は、生活現実の変化に即応する実践と、変化の変化を支えていく実践の上になり立つ。

雑誌『幼児の教育』約八十年の歴史は、何であったのか。幼児のしあわせを求めての八十年ではなかったか。そのための保育実践の追究ではなかったか。

保育が科学なのか、芸術なのか、二者択一に迫る必要はない。保育は芸術であると同時に、科学でなければならぬ。人間の誕生は、厳密に科学の法則の貫徹であるが、同時に、その誕生以後の生活経験は、人間性の陶冶であり、それは、保育の芸術でもある。気高い品性をもった人間の追究は、芸術の追究過程である。

保育実践の記録化は、保育の科学性の追究であると同時に、保育の人間性、芸術性の追究である。幼児の行動の「コマコマ」、保育者の言葉の一つひとつは、人格・品格形成への過程である。人間の芸術性は、他の保育者や幼児とのかかわりを通して確かめられていく。一つの言葉、行動を、全体的視野で見ぬく力を要求される保育者は、「人間理解」の最高の権威者でなければならぬ。

最も人間的修養を要求される職場、これが幼稚園や保育園ではないか。幼児のもののいわぬ行動が示す中味の理解は、保育者へ容

易ならざる力量を要求している。保育の芸術家は、同時に保育の科学者である。

私の園長専門職論

こうのべてくると、保育の現場は、実は、大変きびしい職場であり、最も社会的尊敬を与えられるべき職場である。しかし、現実にはそうなっていない——社会的評価、待遇——とすれば、それは、歴史的位づけの浅さのためであらう。

保育者の専門職者性の向上が、この課題への歴史的解答でもあらう。保育の専門職者性の高揚、保育実践の質的向上のためには、園長の教育的識見が、きびしく問われるのである。現実には、園長職といっても、多士済々であり、一般論として論じられないのが実情である。兼任園長も多くみられるし、保育のとらえ方も企業利益の保育という人も存在し、保育観もさまざまである。

こうした現状の中で、園長の教育的識見の水準が、あらゆる面で、大きく左右する。保育実践の質の水準、職員の人格形成、現職教育の進展にも、大きく影響を与えている。園長の経営管理論は、人事管理のみでなく、あくまで、子どもと教職員の、発達を

保障していくことにある。

たとえ職場にすぐれた保育者がいても、その保育者を見る目も、職場の中で正しく評価していく仕事は、簡単なようで、やさしいことではない。園内の保育者の保育の質を問うことができるのは、自らもまた、その保育の質の高さをハダで認識しうる存在であることが望ましい。

人間形成の微視的側面をとらえることが要請されている保育者にとって、職員間の人間関係が調和のあることも大きなポイントとなる。人間関係の把握のためには、園長自らの教育的識見が要（カナメ）となる。経験年数、人生経験、性格などのちがいをうまく調和させ、実践の質の向上を図るのは、容易ならざる技である。まさに、科学と芸術を共に理解し、共感の世界を形成できる人材こそが、園長としての教育的識見を獲得できる人である。

指導者像のとらえ方であるが、二つの典型的タイプがあるのではないか。一つは、実践をいつも理論的に整理し、提起できるタイプである。もう一つは、実践の中に、そのすべてをうちださうるタイプの人である。保育者のタイプは、どちらかといえば後者の人が多い。このこと自体は、大変すばらしい事実を示しているが、これからの保育を考えると、必ずしも、これにとどまることは許されず、新しい質のタイプを要請されるであらう。

保育現場は、圧倒的に女性の多い職場であり、職員間のチームワークが、ことの他重要である。園長は、必ずしも、女性ばかりでなく、男性園長も存在している。男性園長の存在は、現状では、貴重な実践批判者であり、その社会的経験は大切にすることである。同時に、男性園長もまた、保育の質について、積極的提言のできる教育的識見が必要である。

幼児教育の世界も、社会的にも、実践的にも、世論の関心の高まりがあるだけに、従来の園長論や園長の社会的役割では、不十分である。より前進していくためには、社会的判断のできる人にかつ、保育実践の中味にわたって、理論的にも指導できる人材が求められる。

園長は、ともすると、園の行政的役割におわれてしまい、園経験の中心である保育実践への指導をおろそかにしやすいからである。現職教育の場においては、職員をリードする園長の教育的識見が大きなカギをにぎっている。それは、職員の集団討議過程での論議をおこなう中で、明確にされる。園長に、教育的識見のない場合には、論議は停滞し、それ以上の発展的展開は、すすまない。論議の質の打開は、園長の理論的リードがあつてこそ可能と

なる。こうした事態を打開できる力量こそ、識見を有するといえよう。

「幼児理解」という総合的指導を要する場面では、園長の力量が、見事に表出される。文学、美術、教育、心理、環境など、多くの場面で、事実への回答を迫られる。そこで、的確に回答を出していくためには、何が必要であろうか。幼児とのかかわりへの指示、研修方向への指示、環境へのアドバイスなど、すべてを総合的に判断する力、文章力、自己表現力——総合的力量、教養が必要であろう。

ところで、「子どもを見つめるたしかな目」をもつ園長の資格要件は何であろうか。

一つは、保育への情熱である。あたり前のことではあるが、幼児への烈々たる情熱をもつことが大前提である。

二つには、つねに自己点検できる人である。それは、実践に対しても、子ども、親に対しても、つねに謙虚であることである。それは、自己にきびしく、つねに修養を積む努力をおこたらない人である。

三つには、園内の教職員を大切にする人である。心と心の結びつきを大切にし、かつ、具体的なしごとの中味で、教職員を大切にできる人である。

四つには、広い視野をもち、社会的評価のできる人である。いい仕事なら、他分野の専門性からも積極的に学ぶことのできる人である。

保育実践記録を集積しよう

最後に、私が日頃感じていることの一つとして、保育実践記録を集積、保存することが大事な仕事になっているということである。実践記録は、ずい分多く生みだされていると思うが、これを体系的に整理することが、今後の保育実践の質的向上にとって、不可欠ではないか。

毎日くり返されている実践は、大部分が記録に残ることなく、消えていく。しかし、子どもの人格の中に確実に蓄積されていく。これらの実践を再現できないだけに、さまざまな分野から、記録化し、体系化し、収集することが望まれる。

もう一つは、手作業を通しての実践記録の実録化、分析化する仕事がある。今日の状況は、実践記録を残して、かつ、それを収集、保存、分析する場所が必要である。これからの保育史を語り、現状から進歩していくためにも、各々の時代の保育実践を残しておくことは、保育百年の計からいっても、大変有意義な仕事

ではなからうか。

過日、津守真先生の「桑名日記、柏崎日記」の解説をお聞きし、幕末期に、これだけ、刻明な育児日記が残され、かつ、完璧に近く保存されているのを見て、一層実践記録を残すことの意味を痛感したのである。

やがて、保育実践記録集が企画されるであろうが、多くの先達の実践に学びながら、自由保育、集団保育、誘導保育等々の実践に基づいた論争を大いに展開したいものである。各地方の地域に根づいた保育実践が集積され、それが保育内容水準の向上につながっていくことが期待される。

園長の教育的識見もまた、これらの仕事にかかわって、歴史的に判断されるだろう。

(中京女子大学)

※

※

※